

上町台地から都心居住の真価を問う 「上町台地からまちを考える会」発足から1年の活動報告

弘本由香里

はじめに

2003年7月に発行した『CELレポート18号』のトピックス欄で、大阪市の上町台地界隈でまちづくりに関わる地域住民（市民グループ等）を中心したネットワーク組織「上町台地からまちを考える会」の発足（筆者も理事の一人として参画）をレポートした。

「上町台地からまちを考える会」は、高度な都市生活機能、医療・教育・文化施設等が集積し落ち着いた住環境が存在することから、都心居住の適地とされる上町台地界隈において、地域の文化に根ざしながら新たな価値を創造する、生活者本位の都心居住・都市再生のあり方を問い直し、実現していくことをミッションに2003年5月誕生した団体である。

発足後約1年が経過した2004年6月、同会は一周年シンポジウムを開催した。その場で平成15年（2003年）度の取り組みに関する報告書を配布し、活動報告を行っている。本レポートは、同報告書の主要部を転載し、「上町台地からまちを考える会」発足から約1年（発足の経緯も含めて）の活動を簡単に紹介するものである。

なお、転載紹介する報告書は、ハウジングアンドコミュニティ財団による「平成15年度住まい・まちづくり活動団体の実践的な取り組みに関する調査」において、「上町台地からまちを考える会」自らが対象団体の一つとしてとりまとめた内容をもとに作成しているものである。執筆は、全体のとりまとめを行った前事務局長の早川厚志氏を中心に、各事業等の担当者が分担して行っている。

.....

※以下「上町台地からまちを考える会平成15年度の取り組みに関する報告書」から主要部分を転載

1. 活動の背景（省略）

2. 活動の経緯と目的

（1）活動の目的

都心での暮らしの喜びや安心は、決して大規模な再開発や便利な施設の集積だけで、かなえられるものではなく、そこに暮らす人々が、さまざまな人と出会い、個々の違いに気づき、コミュニケーションを育み、新しい価値を生み出していくというダイナミズムのなかにこそ、都心に生き会う価値があるのではないだろうか。

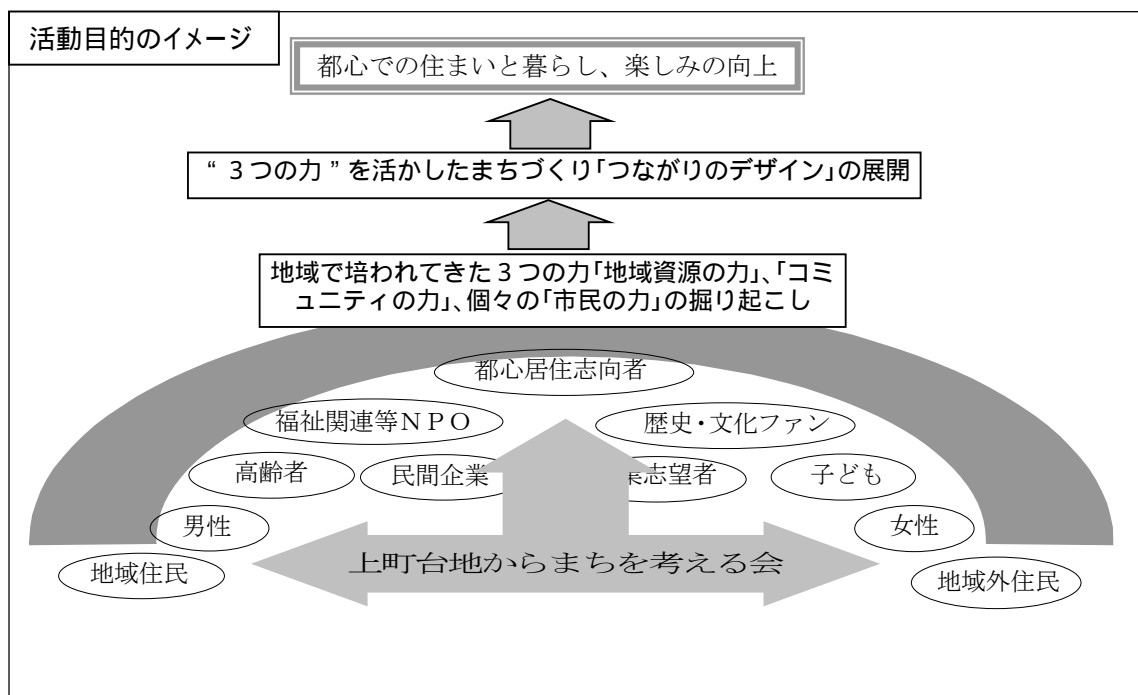
上町台地一帯には、市民が出会い、表現し、つながることのできる舞台がたくさん点在している。歴史、芸術・文化、国際交流、福祉・医療、教育、宗教など多彩な資源が見出せる。また、資源は場所だけに限らず、地域教育にかかわる熱心な活動者や、固有の活動拠点を形成する新しいタイプの実践家も登場しはじめているなど、生活本位に生きる人材

の豊富な資源がある。

場所や人、さまざまな資源がつながり、活性化すれば、まちに賑わいが戻るであろうし、多くの人々が上町台地一帯を訪れ、固有の文化を再発見する契機にもなると考えられる。そこに、内発的・持続的な新しい「産業価値」や「コミュニティ・ビジネス」を生み出す可能性も秘められている。そうした資源を丁寧に結び、だれもが上町台地での共通の記憶として編みあげ、ゆっくりとトータルに豊かな「都心居住の人間学」とでもいうべきものを、育むことができるのではないだろうか。そんな思いをつなぎ、活かし合う場の必要性を考えるなか、「上町台地からまちを考える会」(以下、考える会)の設立に至った。

今を生きる大切な手がかりとして、また地域を育む創造的な素材として、資源をどう掘り起こし、評価し、つなぎ、育てていくのか。それを果たしていくことが、考える会の最大の使命である。

古代から現代まで営々と人々が暮らしを積み重ねてきた上町台地の過去・現在・未来を貫いて、だれもが共通の記憶を持ちあえる。そして、人間の誕生から成長、さらに老いや死をも包含する豊かな人生観や、一人ひとりの創造的な生き方(アート・オブ・ライフ)を実現できる機会に満ちた、成熟する大人のまちと暮らしを、この地に集い、暮らす人々とともに創造していく。そのためにも、行政と市民はもとより、地域の住民、NPO、地元企業、大学、あるいは在住の外国人や障害を持った人など、世代や性別も超えて、互いにつながり、対等な立場で協働することのできる環境づくりこそ、魅力ある「都心居住」実現の不可欠な条件といえるであろう。そのために、考える会では「資源力」、「コミュニティ力」、そして「市民力」という3つの力の育成を図るとともに、それら3つの力をゆるやかにネットワークしながらまちを再構築していく、「つながりのデザイン」による都心居住、都市再生を目的とする。



(2) 活動の経緯

上町台地からまちを考える会は、天王寺区筆ヶ崎に立地する大阪赤十字病院建て替え等に伴う余剰地において、都心ならではの豊かな地域資源を活かした住宅市街地整備のあり方を検討した研究会(現都市基盤整備公団主催)に端を発している。

1998年からはじまった研究会では、ハード中心の整備手法を検討する従来型の研究会の枠を超え、社会心理学や生活文化学など多分野の学識経験者、周辺地域で活動するまちづくり関係者らも交えながら、都心居住のあり方を根本から見直す作業を行ってきた。また、大阪赤十字病院が立地する筆ヶ崎地区だけでなく、上町台地という広い地域を対象に地域資源の掘り起こしにも努め、ソフト・ハードのさまざまな地域資源の精査等も進めた。そうした研究を積み重ね、上町台地の多様な地域資源を活かしたライフスタイルを考えながら、人と地域を結ぶことでより良い暮らしや楽しみなどを実現する「上本町コミュニティネットワーク構想(以下、CN構想)」の提案に至った。同構想では、時代の流れやライフスタイルの変化等にも対応しやすいスケルトン・インフィル住宅を中心とした施設整備と、地域住民等によるコミュニティネットワーク組織による幅広い生活支援のシステム整備を具体的に示した。

その後、研究会は同構想にもとづいた施設整備、地域整備のあり方等を検討し、2001年度で終了したが、大阪赤十字病院建て替えという枠を超えて、上町台地上ではCN構想は欠かせないという思いから参加メンバーの一部がまちづくりに関するブレインストーミングという形で集い、2002年春より、人と地域を結ぶ組織づくりの模索をはじめた。

2002年夏にはブレインストーミングメンバーを中心に、設立準備組織として「上町台地のまちづくりを考える会(旧仮称)」の名称を掲げ、同年9月と11月にはCN構想や都心居住のあり方を広く社会や地域に問い掛けるシンポジウム等も開催するとともに、同年12月には長屋再生を通じて地域風土や古い街並みでの暮らし方などに光をあてようとするグループや、在日コリアンを中心に人権活動に取り組む団体、コミュニティや地域文化の拠点としての寺院の再生をめざす組織、若い視点から地域資源を丁寧に掘り起こそうとする若者たちなど、上町台地一帯でまちに関わる多種多様なメンバーが集まり、「上町台地のまちづくりを考える会(旧仮称)」の正式な設立準備に向けた「発起人会」を結成した。「発起人会」では組織の正式な設立準備を進め、2003年4月には会の名称を現名称である「上町台地からまちを考える会」と改めるとともに、そのプロセスを通じて、メンバー間、地域間の相互理解を深めながら、組織のあり方などについても議論を重ね、同年5月31日に地域の鎮守でもある生国魂神社において発会式を挙行し、地域に船出することになった。発会式以降は考える会の目的達成に向けたプロジェクト、「上町台地・アートツーリズム」、

「上町台地・アートマンスリー」などを実践展開する一方、「上町台地・まちの学校」の具体化も進めるなど、地域資源力、コミュニティ力、市民力の育成とそれら3つの力によるつながりのデザインの具現化に着手したところである。

また、実際に地域で活動するさまざまなまちづくり組織の代表、CN構想を検討してきた学識経験者等が集い、具体的、実践的な取り組みを行うとする先駆的な試みのため、相互理解をより一層深めるとともに、考える会自体の見つめ直しも並行して行うべく、研修活動も積み重ねている。

3. 活動の内容

(1) 発会に至るまでの主な活動 (省略)

(2) 発会式と本格的な事業展開

「上町台地からまちを考える会」発会式

設立準備を進めてきた「上町台地からまちを考える会」は2003年5月31日(土)に、上町台地一帯の鎮守でもある生国魂神社にて発会式を挙行し、正式に立ち上がった。また、発会式をもって発起人会は考える会に移行するとともに、発起人8名は考える会の理事に就いた(理事名は末尾に記載)。



発会式では上町台地一帯でまちづくりに関わる地域住民、大阪府、大阪市ならびに関係各区などの行政職員、都市基盤整備公団等の公的まちづくり団体、学識経験者等300名余に案内状を発送し、125名もの参加を得られた。

当日は上町台地一帯でまちづくり活動を行う理事から、「まちの魅力・会の魅力報告」と題したそれぞれの活動と活動の舞台となる地域に関する紹介を行った。具体的には寺町、空堀、コリアタウン、五条という4つの地域の紹介と、寺院、長屋、在日コリアン、地域コミュニティ、若い視点でみた地域資源という5つの切り口での活動の紹介が成されたが、それによって考える会としてネットワークされる地域とさまざまな活動がリアルに参加者に伝えることができた。

また、生活文化や芸術文化など広くアートで結ぶまちのあり方に関するパネルディスカッション「上町台地から～アートと学びがとりもつ出会い」も開催し、まちでつながる意味とつなげる素材などについて参加者とともに考える機会を得た。

当日はマスコミ関係者の取材もあり、考える会と発会式の様子について新聞等での紹介

も後日行われた。

日時: 5月31日(土)13:00~16:00 交流会 16:30~17:30

場所: 生国魂神社参集殿

参加者総数: 125名(交流会参加者 85名)

アートでつなく、アートでつながる~上町台地・アートマンスリー

「上町台地からまちを考える会」では、歴史や文化、景観、医療、福祉、そして人といったさまざまな地域資源を有する上町台地とその周辺で、それら地域資源を掘り起こし、価値を再認識し、つないでいくことで、より良く集い、暮らし、学び、遊べる空間形成に取り組んでいきたいと考える。(中略)

「上町台地・アートマンスリー」では考える会が主催となり、各イベントの実行組織の共催を得ながら、統一ロゴやチラシづくりなどの共同PR、各イベントでの相互PR、関係者交流などに取り組んだ。(詳細省略)

【実施体制】

上町台地からまちを考える会(共同広報実施主体)、
應典院寺町倶楽部、からほりまち・アート実行委員会、ワンコリアフェスティバル実行委員会、堀越神社振興会・DOCnet。(各イベント実施主体)

【対象となったアートイベント】

應典院コモンズフェスタ、からほりまち・アート、ワンコリアフェスティバル、
堀越神社秋例祭

【開催時期】 10月19日(日)~11月9日(日)

研鑽の機会を通じた組織づくり~考える会理事研修

【経緯】(省略)

【概要】

第1回目「NPOマネジメント概論」、第2回目「私ができること、私がしたいこと、会がすべきこと/6W3Hで考える」、第3回目「学術的な視点から、理事の関係性の検討」、合宿研修「第1部:会の現状を見つめる」「第2部:会の背景を振り返る」「第3部:ビジョンの創造」「第4部:事業計画骨子のまとめあげ」(詳細略)

【結果】

理事研修は、当初目的の、考える会が抱える課題に対処し、問題解決の主体として取

り組んでいくための発想と技法を理事が身につけるに止まらなかった。相互の意見交換の中で、それぞれの活動実践の内容と、同時にその人自身をより深く知るきっかけとなった。同時に、そうした交流をとおして、自らが属する集団の課題にも向き合うこととなり、考える会の関わりが、現場の実践の深化に寄与したものといえよう。理事研修は、さしずめ「考える会を考える会」となった。

無論、理事研修が遺したものは、「交わってよかった」という感想に止まるものではない。研修合宿においては、「考える会に足りなかったのはイニシアティブ・指導性」などの辛辣な意見が出た。その他、「それぞれの事業の蓄積とそれに対する理解や評価が足りなかったのではないか」などの意見は、今後につながる自己分析の習慣が身に付き始めている萌芽と言ってよい。もちろん、今後に向けた資源を担保できた一年を確認するよい機会となったのは間違いない。(後略)

地域資源の掘り起こしとデータベース化事業

上町台地の資源・活動に興味のある人、またこれから活動を始めたい人が参照できるように、資源自身に関する情報のみならず、既存の活動においてそれら資源がどのように活用され、ネットワークされているかについての情報も網羅したデータベースを作成する。つまり、資源のリストであると同時に資源のガイドとなることを目指す。

扱う資源の基準は、「活動とリンクすることのできる人・モノ・情報」とする。〈人〉が〈モノ・情報〉を〈活動〉の中で活用しているという視点から、資源を大きく〈人資源〉と〈モノ・情報資源〉の2つに大別し、その媒介となる活動を加えた3つの要素に分類してデータベース化する。(後略)



シートに記載する情報

- 資源名
所在地や通し番号を添える。
- 検索キー
機能や特性など。1つの資源に複数も許容。
- 概要
歴史などの情報。シートのある関連資源・活動については強調表示する。
- 写真
- リンク先

活動紹介シート例: からほりまちアート

地域資源を活用した都市滞在型・生活文化体験型観光～上町台地・アートツーリズム

大阪といえばキタやミナミ、USJや道頓堀といったイメージが内外で形成され、ガイドブックなどでもそれらを中心に紹介されがちである。しかし、難波宮以来のまちの歴史—少なくとも秀吉の大阪城築城以来 400 年余の時を有する大阪、特に上町台地一帯には長年にわたって形作られてきたさまざまな“大阪らしさ”“日本らしさ”がある。

それらを活かしながら、“大阪らしさ”“日本らしさ”にゆっくりと触れ、学び、楽しみ、癒されるようなスローなツーリズム『上町台地・アートツーリズム』を考える会として育んでいく。

今年度は2回の試行を行い、モデル的なプログラムづくりに取り組むとともに、大阪で学ぶ外国人留学生の方々や天王寺区内のPTA関係者等、対象者を絞ったツアーを実施することで、上町台地とその周辺の地域が持つまちの魅力、暮らしの魅力のインパクトなどを探ることを図った。(詳細省略)

【第1回ツアー】

9月28日(日)午前9時～午後7時

(寺町体験) (空堀体験) (コリアタウン体験)

【第2回ツアー】

3月12日(金)午前10時～午後12時半

(大蓮寺見学) (光明寺見学) (心光寺見学)



【ツアー参加者】

第1回ツアー：大阪に滞在する外国人等

第2回ツアー：天王寺区内のPTA関係者、建築関係者等 10名

地域資源を活用した地域学習・地域交流機会～上町台地・まちの学校

まちづくり、まちおこし、まち残し、まち育て、多様な言葉で「まち」に向き合う意味、意義が語られている。また、地域を担い手の立場から捉え直し、その担い手側からまちを考えていく場と機会も増えてきた。私たちは、歴史や文化、景観、医療、福祉、そして人などの多様で多彩な地域資源を有する上町台地とその周辺で、新たに、あるいは改めて地域資源を掘り起こし、さらなる価値を創出することが必要と考える。

一方、「資源力」、「コミュニティ力」、そして「資源力」を育成していくために、地域資源と資源を有する人々のつながり、さらにはそうしたつながりを形にしていける場の形成に

取り組んでいくことも大切である。そのために、豊かで多彩な地域資源をフルに活かしながら、地域住民も含めて、上町台地やまち、暮らしなどについて考える機会をつくり、“まちを考える”輪を着実に広げていくとともに、地域資源＝魅力をアピールしながら、地域イメージを高める取り組み『上町台地・まちの学校』を展開した。(詳細省略)

【講座構成】

「コリアタウン異文化体験会」(2003年11月15日(土)実施)

「音風景図鑑・冬」(12～2月実施)

【実施体制】

主催：上町台地からまちを考える会

協力：應典院寺町倶楽部、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所、大阪大学大学院人間科学研究科渥美研究室、からほり倶楽部、京都大学大学院工学研究科高田研究室、在日韓国民主人権協議会、西代官山クラブ、他。(以上、検討中)

地域資源を活かした都心居住スタイルとまちづくり提案策定～筆ヶ崎地区整備事業への提案書策定

考える会では都心居住・都市再生のあり方について考え、広く社会に問い掛けていくことも活動の一つとしている。その最初の取り組みとして、考える会結成の発端となった大阪赤十字病院の建て替えに伴う余剰地とその周辺を対象とした筆ヶ崎地区整備事業に対し、「筆ヶ崎地区整備事業への提案書」を策定した。提案書は2003年6月25日に筆ヶ崎地区整備事業の事業主体である都市基盤整備公団関西支社に提示した。

筆ヶ崎地区整備事業への提案の基方針には「“上町台地に暮らす”意味の追求」、「だれもが暮らしよいまちの追求」、「ソフトとハードの融合による暮らしとコミュニティを支えるシステムの追求」の3点を掲げ、具体的提案検討のベースとした。

具体的提案としては以下のようなイメージを提示した。

【多様な人が住める、多様な人を受け入れるために】

上町台地での暮らしをより豊かなものにするためには、個々の価値観でさまざまな地域資源を活かす住民が増え、彼らが地域で共存することで多様な価値観と地域資源を認めあい、重



ね合うことが必要である。そのためにも多様な人が住める、多様な人を受け入れる地区整備・住宅整備が求められる。

○ 住み手の多様性を受けとめる住宅タイプの必要性

- ▶ コレクティブ住宅、コーポラティブ住宅、シンプル住宅、シェアードハウジング、SOHO向け住宅、短期滞在型住宅など、都心居住ニーズを受けとめ得る住宅タイプの供給が不可欠である。
- ▶ 多様な住宅が混じり合うことで、多様な住み手の共住が実現でき、多様な世代・世帯で構成されるバランスのとれた住民構成が導かれる。また、住み手の多様性はここでの暮らしの多様性、発展の多様性にもつながる。

○ スケルトン・インフィル方式による持続的な価値の創出

- ▶ 多様な都心居住ニーズをフレキシブルに受けとめ、地域とのつながりを可能にしていくために、持続性のある構造体と柔軟な内部の更新性を合わせもつ、スケルトン・インフィル方式の採用が望まれる。
- ▶ 耐用年数が高い骨組み・スケルトンと、耐用年数を比較的短く設定できる内部・インフィルに分けることで、内部空間の修改築の自由度も高くなるため、まちやライフスタイルの変化など時代のニーズに応じながら、構造躯体はそのままに建物の用途を変化させていくことができる。
- ▶ 構造躯体はそのままに建物用途だけを変化させていくことが可能なため、まちなみを大きく変えることなく、21世紀を生き抜く建物の建設も可能となる。

【地域をつなぐ、地域とつながるために】

筆ヶ崎地区と上町台地一帯をつなぎ、新住民が既存住民や地域とつながることは、筆ヶ崎地区整備を従来型の再開発とは大きく異なる、地域的、社会的意義のあるものに変えることである。また、上町台地にこれから刻まれる歴史のなかに筆ヶ崎地区とそこに暮らす新住民をしっかりと組み込んでいくことになる。

○ 上町台地と暮らしをつなぐ、「上町台地まちの駅（コミュニティ・ネットワーク・プラットフォーム）」

- ▶ 上町台地と筆ヶ崎での暮らしをつなぐ機能として、さまざまな人々をつなぐことのできる仕掛けをもったコミュニティ拠点や、それらをマネジメントする拠点等の施設の存在が欠かせない。同時にハード面での、歩行者空間や広場等のあり方も、上町台地と筆ヶ崎での暮らしをつなぐうえで重要な役割を果たす。

上町台地コミュニティ・アート・スペース「筆ヶ崎CAS」

- ▶ 筆ヶ崎地区と上町台地、新住民と既存住民、来訪者と住民などをつなぐ機能として、広義のアートの文脈で彩られたコミュニティ拠点「筆ヶ崎CAS」。ここを中心に上町台地に新たなドラマが生まれる。

)コミュニティ・アート・カフェ「筆ヶ崎茶房楼」

- 筆ヶ崎CASのメイン機能である、さまざまな出会いを育むコミュニティ・カフェ。
- ガラス越しにアート・アトリエやラジオ上町の放送もリアルタイムに見聞きすることが出来る。
- 上町台地アートツーリズムや上町台地アートマンスリー等の活動と連携することで、多様な出会いの機会が生まれる。

)コミュニティ・アート・アトリエ「手づくり処・一筆二筆」

- ともすると、ストレスや孤独を感じるこの多い都心暮らしの中で、子どもからお年寄りまで、

だれもが気軽に表現の機会に触れ、心癒される、コミュニティ・アトリエ。

- アトリエで作られた作品を隣のカフェや広場、歩行者空間ネットワークなどに展示することで、作者と新住民、既存住民がつながるきっかけも得られる。

)コミュニティFM「ラジオ上町台地」

- 上町台地に集い暮らす人たちが情報を発信し、出会いつながるメディアとしてのコミュニティFM。
- 放送を通して、コミュニティFMや筆ヶ崎CAS、筆ヶ崎地区の存在が認知されていく。
- 上町台地・まちな学校等の活動と連携することで、上町台地ならではのプログラムの提供が可能である。
- 地域の生活情報を丁寧に伝えることで、上町台地一帯の交流、安心・安全、環境など多様な面に貢献できる。また、一人暮らしのお年寄りや医療・福祉施設の入院患者・入所者もラジオを通じて地域とつながることができる。

)コミュニティ・ガーデニング「筆ヶ崎緑苑」

- 新住民と地域住民やNPO・学生等と一緒に育成に取り組む地区内の植栽「コミュニティ・ガーデニング」。
- 地区内の植栽は花壇だけでなく、赤十字病院の椰子の木を受け継ぐことで地域の記憶を伝えたり、地区内を芝生で覆うことで子どもやファミリーがくつろげる空間が出来る。また、植栽の一部を貸農園や貸花壇として開放することも出来る。緑豊かな空間は筆ヶ崎地区のイメージをより高める。
- 上町台地アートマンスリー等の活動と連携することで、広がりのあるアクティビティを提供できる。

コミュニティ・マネジメント・オフィス「上町台地まち育てオフィス」

- 地区整備を行う民間事業者、筆ヶ崎CASや暮らしの安らぎ館（ライフ・サポート・ステーション 下記）の事業主体、運営に関与するNPOやボランティアなどと連携を図りながら、地区内外をネットワークし、まちに関わる人や組織を育て、まちづくりをマネジメントする「上町台地まち育てオフィス」を付置することで、これまでの提案が具現化していく。

○上町台地と暮らしをつなぐ、歩行者空間ネットワークと立体街路・広場

- 地区内でのまちな活動を醸成するとともに、まちなアクティビティや地域資源を地区内に誘導する仕掛けとして、地区内外を結ぶ歩行者空間ネットワークと立体街路、だれもが利用しやすい広場の設置が望まれる。

☆地区内をつなぎ、コミュニティを育む仕掛け

- 地区内を縦横に結ぶ動線は、多様な住宅の多様な住み手同士や、住み手と筆ヶ崎CASなどの利用者が出会う仕掛けとなる。出会いの機会を増やすことでコミュニティを育てていくことが期待できる。

☆地区外をつなぎ、コミュニケーションを促す仕掛け

- 地区外とつながる動線は、住み手が地域に気軽に1歩を踏み出せるよう促すとともに、住み手が上町台地のアクティビティや地域資源につながりやすくすることで、暮らしの選択肢を増やすことが出来る。
- 上町台地アートマンスリー等の舞台の一つとすることで、アクセスのチャンネルを多様にします。
- 上町台地の暮らしと筆ヶ崎地区のコンセプトを理解し得る、地区外の人々を地区内に引きや

すい仕掛けを設けることで、まちの表情やアクティビティの幅が広がり、子どもを見守る目も多様になるなど地区内の安心感も高まることが考えられる。また、筆ヶ崎CASなどの事業や商業機能、住み手が取り組むコミュニティビジネスなども発展性が広がる。

【地域を支える、地域と支え合うために】

筆ヶ崎地区を含む上町台地での暮らし・営みを支え、筆ヶ崎地区が上町台地全体と支え合う関係になることは、新住民と既存住民に大きな安心感をもたらすことになるであろう。安心感あふれる暮らしは、次代を担う子どもたちにも「ここで暮らしていきたい」という気持ちを醸成していく。

○ 上町台地の暮らしを支える、ライフ・サポート・ステーション「筆ヶ崎暮らしの安らぎ館」

➤ 筆ヶ崎地区とその周辺での地域住民の暮らしを広く支えるライフ・サポート拠点「筆ヶ崎暮らしの安らぎ館」。子どもからお年寄りまで、一人暮らしからファミリー世帯まで、多様な人々の暮らしを見守り、支える機能があることで、だれもが住み良いまちづくりもサポートする。

高齢者福祉サービス「楽老ステーション」

- デイケアサービス機能や在宅介護支援機能などからなる高齢者福祉サービス「楽老ステーション」。
- 新住民はもちろん、地域住民もサービスの利用を可能とするため、筆ヶ崎地区と周辺地域、新住民と既存住民をつなぐ役割も果たす。
- 筆ヶ崎CASとの連携で、狭義の福祉サービスを越えた上町台地ならではの暮らしの質を提供できる。

児童福祉サービス「楽育ステーション」

- 就学前保育機能や学童保育機能などからなる児童福祉サービス「楽育ステーション」。
- 地域住民も利用が可能とすることで、子どもをかすがいとした地域交流が広がる。また、筆ヶ崎CASを子どもたちが利用することで、多世代の交流が生まれ豊かな人間性を育むこともできる。
- 広場や歩行者空間ネットワークなども活用することで、子どもの日常を多彩にするとともに、まちの表情を豊かにしまちへの愛着を育む。

コミュニティ・ホスピス「筆ヶ崎日想苑」

- 上町台地に誇りと愛着を持った人々が、人生をこの地で、自宅で完結することができるよう、在宅ホスピスを実現するコミュニティ・ホスピス「筆ヶ崎日想苑」。
- 地区内の筆ヶ崎CASや暮らしの安らぎ館を最大限活用し、周辺地域の医療・福祉機能、NPO、ボランティアグループなどと連携・協働を進めることで、新住民も参画しながらコミュニティ・ホスピス機能を徐々に構築していくことで、地域とのつながりや一体感も醸成していく。

【筆ヶ崎地区が上町台地の歴史の画へと育っていくために】

上町台地には古代からの人の営みが積み重ねられており、筆ヶ崎地区整備事業もその歴史に、21世紀という新しい時代でのまちと暮らしを積み重ねることになることを忘れてはならない。2千年余の歴史がまちづくりを注視していることに留意するとともに、今回の提案にもとづいたまちづくりを以下の視点でさらに深く検討されることを望む。

地域につながる景観形成への配慮を

- ▶ 日本のまちなみは戦後大きく変容し続けてきた。その変容のなかで、異質なまちなみを隣り合せたり、まちの歴史や人々の営みなどを無視した超高層建築物を築くなど、小さな敷地内、建物内のみで完結することを“まちづくり”と称してきた。人々の意識がまちづくりに向かう今、日本のまちづくりを根本から見直す真摯な姿勢が事業者に求められる。
- ▶ 筆ヶ崎地区一帯には地域の歴史・文化を物語る多くの資源が集積している。難波宮の朱雀大路が西側を走るほか、細工谷や北山町など従来からの特色ある住宅地も存在している。そうした地域性を十二分に尊重し、地域につながる視点に立った景観形成が必要である。

歴史につながる眺望への配慮を

- ▶ 上町台地ではその地形から眺望も重要な要素である。例えば、夕陽丘の地名は大阪湾の向こうに沈む夕陽を眺める「日想観」に由来するほか、古代よりこの地を訪れた大陸からの人々が、西に沈む夕陽を見ながら故郷を想い、縁ある人たちを懐かしむこともあったと思われる。一方、台地であるがゆえ、下からの眺望も重視されてきた。船場から見通せた大阪城天守閣、大阪湾に入ってきた古代の舟からも見えていたであろう四天王寺の塔など、台地上の建築物は見られることも考慮して築かれてきた。
- ▶ この地の歴史に刻まれてきた眺望の思想を理解し、その延長線上に位置する建築のあり方を筆ヶ崎で提示することで、歴史の連続性を眺望にも表していくことが必要である。

次代につながる環境問題への配慮を

- ▶ 21世紀は環境の時代と言われ、わたしたちが次の世代にどれだけ良い環境を残していけるか、問われている。近年、建物の長寿命化や省エネルギーシステムの導入、緑化など環境を重視したまちづくりが広がりを見せている。また、省エネルギー型ライフスタイルの試行やリサイクルなど日々の暮らし方に対する働きかけも進みつつある。
- ▶ 上町台地も、環境エコクラブ活動につながった小学校での取り組みや、大阪市立環境科学研究所の立地など、環境との関わりがある程度浸透している地域でもある。上町台地の歴史を積み重ねていくためにも、ソフト・ハード両面で環境を重視したまちづくりが筆ヶ崎には必要である。

人と人がつながるコミュニティへの配慮を

- ▶ 人が歴史を積み重ねるには、人の営みを途切れさせないことが肝要である。人の営みが続くには、人のつながりが欠かせない。そのためには、多くの人が集まり、暮らすなかで、互いに理解し、尊重し、助け合う関係を丁寧に紡いでいくことが大切である。
- ▶ 営々と築かれてきた上町台地の歴史のなかからコミュニティの大切さを見出し、これからも長く筆ヶ崎とその周辺で人の営みが続くよう、コミュニティを重視したまちづくりが必要である。

4. 活動の成果

上町台地からまちを考える会では発会式前から取り組んできたさまざまな活動の成果として、以下の3点を考える。

(1) ネットワーク型組織の可能性の提示

ネットワーク型組織はこれまで理想論として語られることは多かったが、実際には無意識に築かれた距離感や相互の利害等に阻まれ、実践的、機能的に運営される場合は少なか

った。

考える会では地域で活動するキーパーソンとのディスカッション、設立準備組織としての発起人会の立ち上げなど、発足準備のプロセスに約1年の時間をかけて意見交換を重ねた。それが、ピラミッド型の画一的、集約的な組織づくりではなく、個々の自立を前提としたネットワーク型組織づくりを可能にした。その際に、コミュニティ・ネットワークの形成、都心居住や都市再生への挑戦に興味を抱いた人や組織から、無理せずネットワークを築いていった。そのことが、発会から1年足らずのあいだにさまざまな試行に取り組みた一因でもあり、また、試行を通じてネットワーク型組織の可能性を自らも確認するとともに、考える会を注視する人たちにもその可能性を一定提示することができた。

(2) “気づき”によるネットワークされた組織、地域のエンパワーメント

いわゆる「タコツボ化」などが指摘されるまちづくり組織やNPOの活動に対し、考える会が人と組織と地域をつなぎながら、それまで接点のなかった活動団体同士が共有できる価値に目覚め、コラボレーションによる新たな展開を見出したり、他者の活動や地域を間近にみることで自らを省みる機会を持つなど、“気づき”の機会を提供することができた。

それぞれに拠点地域を持ち、さまざまな活動を展開するまちづくり組織が実質的なネットワークを形成することによって、個々の組織が自らを相対化する視点を得ることが出来たほか、“気づき”を通じて、さらに新しい価値の創造の可能性が芽生えつつある。

それぞれの団体が活動をはじめて数年が経つと、日々の活動に追われるなどしはじめ、足元や周辺に意識が向きにくくなりがちであるが、上町台地上で活動する人や組織がちょうどそういう時期に差し掛かったときに考える会のネットワークが形成されたことは、組織、地域のエンパワーメントにつながったと考えられる。

(3) まちを考える視点や機会の拡大

考える会の活動を通じて、まちづくりに関わるさまざまな立場や分野においてもまちを考える機会を広げる役割を果たしはじめた。

これまではまちについて考える場合、往々にして建築や都市計画、土木、居住といった特定の分野からのアプローチに片寄るきらいが少なからずあった。しかし、考える会のミッションに対する社会的関心と理解が進み、事業にふれる機会が増えることで、まちがさまざまな課題を抱え、課題の数だけアプローチの方法があることが知られてきた。特にアートを介在としたコミュニティの再構築やまちなみの再発見、長屋再生を通じた路地や近所づきあいなど身近な生活文化の見直し、マイノリティの暮らしからみた都市の集住性や寛容性の再評価など、今まで都市へのアプローチが少なかった分野からまちを考える機会

を試行していくことで、まちに関わる可能性を広げるとともに、その意義を提示することができた。

5. 今後の展開

上町台地からまちを考える会は発会からまだ1年に満たないが、会の資源であり成果でもある、実質的なネットワーク組織としての可能性を発展的に地域に広げていくこと。そして、実践活動を積み重ねるとともに、その価値と意義を社会に伝えていくことによって、これからのまちづくりの新しい姿として、上町台地から地域の力をエンパワーメントしていく仕組みをつくり上げていくことが今後の目標である。

(1) 資源力を掘り起こし、発信・活用を促していく学習・調査・提言活動の展開

ストック再生型の本質的な都市再生の基盤となる、地域資源の発掘・発信と、活用への提言に取り組んでいく。上町台地一帯のソフト・ハードのさまざまな地域資源を掘り起こし、それら資源が持つ力を再発見・評価する学習・調査活動。そして、資源力の豊かさを広く地域内外に発信するとともに、その活用について多様な知恵を結集しながら検討し、実現していくための提言活動。考える会の強みである知と実践のネットワーク資源を最大限に活かしながら、コミュニティシンクタンクとも言える機能を築く、学習・調査・提言活動の展開を図る。

(2) コミュニティ力を育むネットワーク形成とコラボレーション事業の展開

本質的な都市再生において、最も重要なコミュニティ力のエンパワーメントに取り組んでいく。考える会の資源である、地域に根ざした拠点を持つ活動団体の力を総合的に活用し、都心居住の地でもある上町台地一帯に点在する昔ながらのコミュニティ力、新しいマンション群などでの新しいコミュニティ力、地域に集う人たちのコミュニティ力など、さまざまなコミュニティ力の再生と育成を相互に促していく。また、ネットワーク型組織の強みを発揮し、新旧のコミュニティ力を丁寧にネットワークし、コラボレーション事業の企画・コーディネートを展開していく。

(3) 資源力、コミュニティ力をベースとした地域とのつながりづくり……市民力の育成へ

掘り起こしていく資源力や再生への提言を、コミュニティ力を育むコラボレーションの現場での実践に反映し、その成果や課題を検証するとともに、再び新たな提言・実践へとつないでいく。地域に根ざした試行の循環のなかで、市民・NPO・大学・企業・行政等々とのつながりを徐々に広げ、地域を担う、自立かつ自律した一人ひとりの市民力を育成し、市民とともに地域とのつながりを営々と紡いでいくことをめざす。

(4) ネットワーク型組織運営の先駆的・発展的モデルづくり

上記の(1)～(3)を実践していくために、本質的な都市再生につながり得る、先駆的・発展的なネットワーク型組織運営をめざす。

旧来の都市計画や行政のスタイルに則した組織運営では、個々の市民や活動団体の自立的ネットワークを前提にした豊かなコラボレーションを創出していくことは困難であり、これからのまちづくりの可能性を問うていくためにも、新世代の組織像と運営スタイルのモデルづくりを試行していく。

6. 活動のポイント (省略)

※以上「上町台地からまちを考える会平成15年度の取り組みに関する報告書」から主要部分を転載
.....

追記) なお「上町台地からまちを考える会」の理事及び事務局長等の顔ぶれは以下のとおり(敬称略・50音順)である。

【理事】

秋田光彦(應典院主幹、應典院寺町倶楽部事務局長、大蓮寺住職) ※代表理事

渥美公秀(大阪大学大学院人間科学研究科助教授)

小田切聡(西代官山クラブ代表)

宋悟(ソウ) (コリアNGOセンター代表理事)

高田光雄(京都大学大学院工学研究科教授)

弘本由香里(大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員)

富士原純一(富士原文信堂代表取締役)

六波羅雅一(からほり倶楽部代表、六波羅真建築研究室代表)

【事務局長】

山口洋典(大学コンソーシアム京都研究主幹)

※前任者(2003年5月～2004年2月)は早川厚志(まちづくり工房)

【オブザーバー、スタッフ】

その他、地元行政関係者や拠点地域関係者、京都大学・京都大学大学院、大阪大学・大阪大学大学院、大阪市立大学、立命館大学等の学生をはじめ、多数が参加している。

また、冒頭でも述べたとおり、本レポートに転載紹介した「上町台地からまちを考える会平成15年度の取り組みに関する報告書」は、全体のとりまとめを行った前事務局長の早川氏を中心に、各事業等の担当者が分担して執筆したものである。 ■